

# 大道よもやま話



【山王神社からの大道町内】

## ◇大道の歴史

このあたりは金沢や鎌倉とも近く、軍事的・経済的に大変重要な地でした。大道の歴史も大変古く、鎌倉の玄関口として早くから開けました。

今から約870年前の久安3年（1147年）に常福寺（現在の宝樹院の南側崖下にありました）が開山され、大道一帯が同寺の領地（寺分）でした。常福寺には、行基作といわれる本尊阿弥陀三尊像が祀られ、弘安5年（1182年）北条



実時追善供養に称名寺本尊と共に祀られた形跡があることから平安末期の造像であることが明らかとなり、平成4年に神奈川県的重要文化財に指定されました。

常福寺は、中世

末以降に衰微し、明治維新の際に廃寺となった経緯から、阿弥陀三尊像は宝樹院の境内にある阿弥陀堂に安置されています。

こもんじょ  
古文書によると、朝比奈峠が出来た以前、鎌倉へ通じる道は二つあったようです。一つは諏訪神社を通り、尾根伝いに朝比奈の熊野神社の左側の谷を下って、大刀洗から十二所を経て鎌倉に入る道、もう一つは大道の西、鼻欠地蔵の手前を右に登り「おおだわら」という所を通り抜けて天園に至り、鎌倉に入る道です。



武相国界鼻掛地蔵 明治15年7月

昭和30年2月 (国土地理院HPより)

鎌倉幕府を開いた頃、寒村だった鎌倉は、5万とも10万人とも言われるほどに人口が急増、大量の生活物資や武器の搬入を必要としていました。

そのため、幕府は朝比奈切通しを開削(1241年に開通)する10年ほど前に鎌倉に和賀江(材木座



海岸)を築港ちくこうした。しかし、鎌倉の海が外洋で、波が荒くこうてん荒天のときには、接岸が難しく、船を破損したり積荷を失うことも多かったようです。金沢の平潟湾ひらかたは水深もあり、波も穏やかで船の航行には絶好の場所で、六浦港を鎌倉の外港として利用することとあわせ製塩地・六浦からの「塩の道」でもありました。

約6百年の歴史がある製塩業は、明治初年までは盛んでした。かつては、上行寺じょうぎょうじ(六浦)の前まで砂浜が迫り、多くの塩場があり、人々の生活に欠かすことの出来ない、塩の生産地でした。朝比奈峠が出来てからは、鎌倉へ塩を運ぶ塩商人が峠を越えて鎌倉に至ることが出来るようになり、大変便利になりました。

川村(字名)は朝比奈峠が開かれて宿場として栄えました。宿屋(橋本や、伊勢や、清水や)花屋、湯や、たびや、うなぎや、床やなどが屋号やごうとして残っています。

また、金沢八景ちやうぼうを眺望する場所が、従来の能見堂のうけんどうから六浦周辺に移り、金龍院きんりゅういん(瀬戸)の九覧亭きゅうらんていや鎌倉から金沢に入った道沿いにある光傳寺こうでんじ(六浦・川)裏山の並木天満宮てんまんぐうが有名になりました。武陽ぶよう金沢八景を眺めながら茶店で休息できる観光地として賑わったようです。

三艘さんぞうは、平潟湾に近く六浦の津(港)として栄え、大型の唐船さんそう、三艘が着岸して積荷せいじ かびん こうろ しょく(青磁の花瓶や香炉・蜀工綿等)

をおろしたことから三艘<sup>さんぞう</sup>という地名になったらしいです。

明治には、大道村は神奈川県久良岐郡六浦<sup>むつら</sup>荘<sup>そう</sup>村三分字<sup>さんぶ</sup>大道となりました。戸数は32戸で昭和初期頃まで変わりませんでした。

昭和11年横浜市へ合併、横浜市磯子区六浦町になり、その後、金沢区六浦町となり、金沢区大道となりました。

昭和15年頃から近郊各地で軍需工場<sup>ぐんじゆ</sup>（追浜航空<sup>おつばまこうくう</sup>廠支<sup>しやう</sup>廠<sup>しやう</sup>）の拡張・移転が始まり、大道も農地が埋められ、横須賀海軍の従業員用の住宅が建ち始めました。

金沢八景から朝比奈までは、曲がりくねった道でしたが、昭和19年に、この住宅に関連する金沢～大船間を結ぶ相武<sup>そうぶ</sup>隧道<sup>ずいどう</sup>が貫通し、六浦原宿<sup>はらじゆく</sup>線（環状4号線）が開通しました。朝比奈町は、街の真ん中に広い道路ができ、景観や住環境が一変しました。

昭和19年に大道国民学校（現在の大道小学校）が開校されました。太平洋戦争戦時下のため、校庭<sup>かいこん</sup>を開墾し、さつまいもを植生したとの逸話<sup>いつわ</sup>があります。昭和50年に朝比奈小学校、昭和53年に高舟台小学校、平成3年に六浦南小学校が、大道小学校の分校となりました。

昭和31年に、朝比奈新道が開通して、金沢八景と鎌倉駅間<sup>きりどお</sup>を結ぶバス路線が開通し、朝比奈切通し<sup>きりどお</sup>に変わる新しい地域重要道路となりました。

## ◇大道という地名の由来

かつて金沢は、三分村さんぶむらと呼ばれていて、社家分、平分、寺分からなり、社家分は瀬戸神社の所領で、瀬戸から瀬が崎にかけての地域、平分は川、三艘から室の木までの地域です。寺分は鎌倉公方くほう（一般的には鎌倉殿と呼ばれていました）の足利持氏あしかがもちうじの祈願所である大道山常福寺の所領でした。

仁治2年（1241年）に北条泰時ほうじょうやすときが10年の歳月をかけて人海戦術あさいなで朝夷奈切通しを完成させた時に、大きな広い道に整備され、二間幅で当時としては、かなり広い道でした。このことから地名が「大道」になったと云われています。また、江戸時代の金沢八景の絵図では、大道村近くに大きな橋が描かれていますが、これは現在の大道橋おおはし（別称：大橋どう）と思われませんが、大きい橋のかかる道ということで大道という説もあります。

また、侍従川じじゅうかわの清流と豊富な水に恵まれ、良質のおいしい米が採れました。

侍従川の清流が運ぶ砂鉄さてつで刀が作れることから刀鍛冶かたな かじが住みつき、金沢各地で鎌倉武士よろいの鎧、武具などの生産が行われていました。現在は、高舟台という地名になっていますが、地元では、高宗某たかむねという刀鍛冶が住んでいたこと

から、その字名に由来して「高宗」と呼んでいました。「たかぶね」とも発音していたため高舟という漢字をあてたのではないかと推測されます。

### 【鎌倉公方（鎌倉殿）】

室町時代に京都に住む室町幕府の将軍が、関東10カ国（相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野・伊豆・甲斐）を統治するために設置した鎌倉幕府の長官。

鎌倉公方の補佐役として関東管領が設置されました。

## ◇昭和3年当時の大道



## ◇大道の巡り歩き

昭和3年当時の大道巡る歩き旅は、川の諏訪神社（ヨークマート裏手）から始まります。参道を登って右の山側が「風来堂」と呼ばれている場所です。

大道は、二間幅の砂利道を西に向かって歩くと左手に「大島屋」（ココス辺り）、道を隔てた向かいに酒屋「大道店」があり、道の両側は、田んぼが続き一部蓮田もあります。

右手に川の光傳寺を見ながら、しばらく西に向かって行き（大道小学校の右側の道）小道を左へ入ったところが和田の谷戸です。入口に「提灯屋」「和田」「紺屋」などがあります。提灯屋や紺屋は、大道をはじめ六浦庄村全体の祭礼用提灯の張り替えと、祭半纏の染め抜きで大変賑わっていました。和田の谷戸は、三浦一族杉本太郎吉宗の子和田義盛氏の居住地に由来すると云われています。

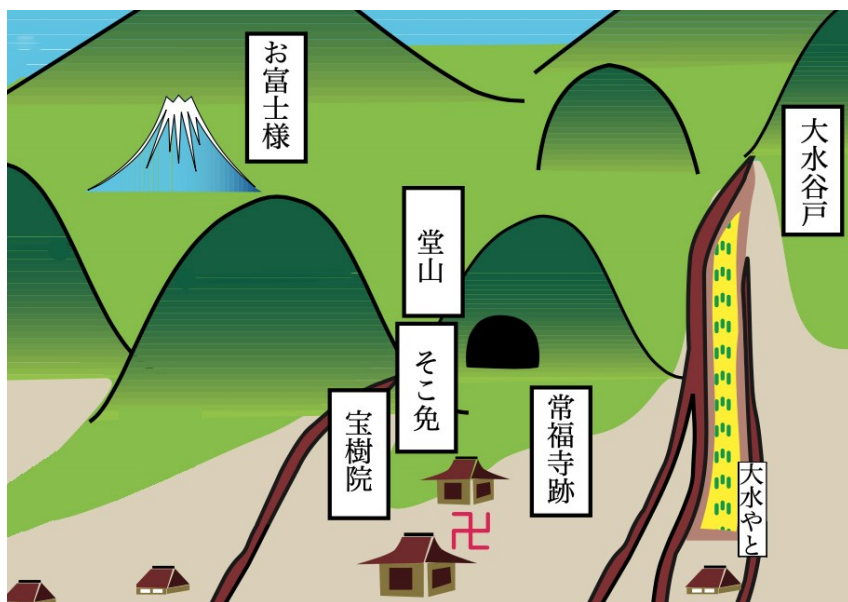
北条氏の領地になる以前の六浦は、和田義盛が支配していたと考えられます。和田一族が自領の安房と鎌倉を行き来するときは、六浦港を経て朝比奈の山越え道を通っていたともいわれます。

砂利道を少し歩くと、右側に大道集会所があって、左かどが小泉純一郎氏の祖父である又次郎さんの生家です。現在は、ローソンの駐車場となっており、小泉又次郎生誕碑



が建っています。この奥は、杉の谷戸すぎやとと呼ばれる場所です。

さらに、西に向かって左の谷戸に入ると、その奥に屋小舎と消防ポンプ小屋があります。その向かいに「ちょうさん」と呼ばれる店があり、塩、味噌醤油、砂糖、酢を計り売りし、駄菓子だがしや乾物かんぶつなどの食料品や雑貨を販売する大道唯一の店でした。この辺りが大道の中心で、道路沿いに数軒の民家が点在します。その先を左折すると「堂山どうやま」という山へ突き当たります。登り口に常福寺跡があります。この山に掘られた横穴を「そこ免めん」と言ひ、関所に関連した場所と云われています。



来た道を引き返して長い階段を登ると、大きなサルスベ



りの木があり、<sup>ほうじゆいん</sup>宝樹院の境内  
です。境内の左側に<sup>あみだどう</sup>阿弥陀堂  
があります。

十字路を右に入ると<sup>さんのう</sup>山王  
<sup>さま</sup>様の参道です。木材商を営む  
「せど」を過ぎて更に西に行  
くと左に折れる小道があり  
ます。この奥が<sup>おおみぞやと</sup>大水谷戸です。  
この谷戸は杉と雑木に囲ま  
れた静かな<sup>やまあい</sup>山間です。現在の  
横濱屋の付近です。奥まで田  
んぼが続く深い谷戸になっ  
ています。

大水谷戸から西へ行くと

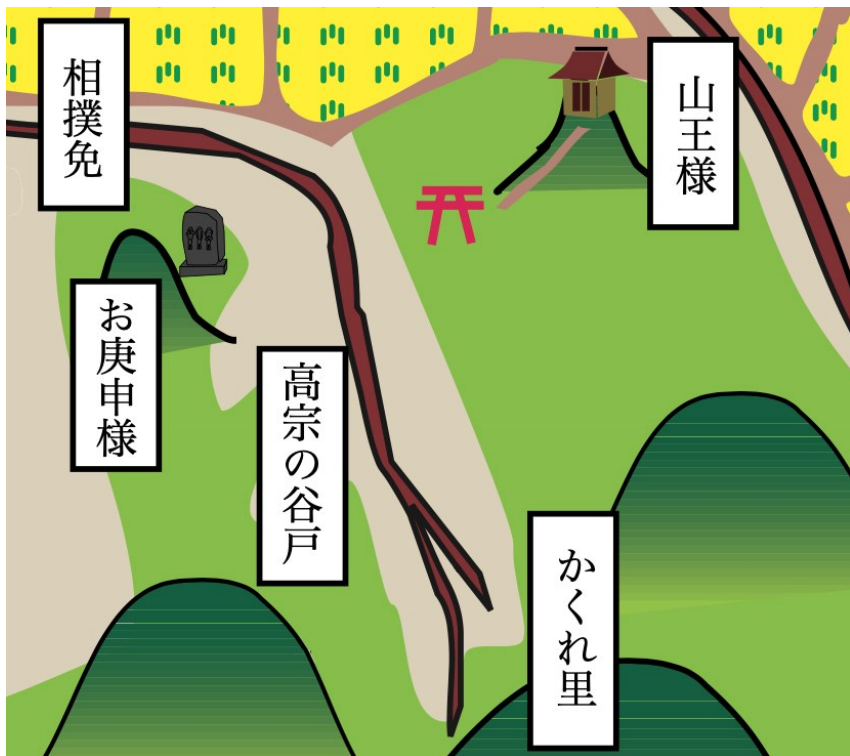
<sup>おおはしどう</sup>大橋道があります。その右側にドンド橋と呼ばれる小さな  
橋があります。その横の三角地がお正月の門松飾りなどを  
燃やすドンド焼きをする場所です。左側は1mほど高く田  
んぼが続いています。ここが地蔵の前と呼ばれている場所  
です。右の山の崖(大道中学校のバス停の近く)に<sup>はなかけじぞう</sup>「鼻欠地蔵」  
が彫ってあって、ここが峠村(朝比奈)と大道村との境で  
す。

この鼻欠地蔵は、相州（鎌倉）と武州（金沢）の境に肥えた土地争いの仲裁役として建立されたが、争いがなかなか絶えないので、お地蔵さんが見せしめに自ら立派な鼻を欠いてしまったと言い伝えられています。

左側を川に沿って行き橋を渡ったところが杉の先です。この奥が大鳥居の谷戸で、しばらく田んぼの中を奥深く行き、突き当り左側の山に登ると「茅場」で、毎年1月中旬に村人総出で茅刈りを行います。更に奥に行くと道が川に入り込んでいます。「滝の沢」という場所です。

この奥右上が朝比奈の熊野神社方面で、左上が池子方面です。大鳥居を出て鼻欠地蔵の右側の細い道を登ると「小がくら」で右奥の谷戸が「かくらの谷戸」で、現在の大道中学校辺りです。「かくらの谷戸」は、元瀬戸神社の神領で神楽・祭祀用の米を耕作する神楽田で「かくらの谷戸」と呼ばれていました。この谷戸は、水が少ないので雨を待って仕事をする場所で天水場と呼ばれています。左の山裾を行くと「いが山」で、田のあぜ道を行くと川間に出ます。ここを左に入ると山王様の鳥居の前です。

毎年10月1日は山王様のお祭りです。当日はのぼりを立て、参道には灯籠とうろうをぶら下げ、鳥居の前には寿司屋が出



て参拝人をもてなしました。境内では豆の木を燃やして湯を沸かして無病息災むびょうそくさいを祈願きがんしたそうです。

山王様の奥が高宗たかむねの谷戸かたなです。その昔、高宗という刀鍛冶かじが住み、侍従川の砂鉄たまはがねで玉鋼で刀を打ったという言い伝えから、「高宗の谷戸」と呼んだそうです。

高宗の谷戸を出た左側に「お庚申様」があります。苔むした石塔に、「青面金剛尊・寛政7年4月8日建立」と刻まれ、三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）が彫ってあります。この辺りが「すもう免」と呼ばれ、左手の崖にやぐら群があり、今も現存しています。その先の左に「わきの谷戸」「大谷戸」「おもて」などを屋号（同



じ姓が多かったので、あだ名のようなもので呼び合っていた)とする五軒集落があります。左側の大谷戸には稲荷様がまつられてあります。

木製の山王橋を渡って、侍従川に沿って左に行くと民家が並んでいます。この辺りが並木と呼ばれている所です。山裾を侍従川に沿って行くと光傳寺の境内に至り、参道を右に行くと諏訪橋があります。これを渡り、右に行った所が出発点で大道巡り歩きは終わります。

#### 【鎌倉のやぐら】

鎌倉の谷戸奥部や切通し道、そして山稜部のハイキングコースなどを歩いていると、必ず洞穴があるのに気が付きます。この洞穴は「やぐら」と呼ばれる鎌倉とその周辺部に見られる中世の墳

墓です。鎌倉の柔らかい岩盤を横穴で内部を矩形に切り抜いて、その中に納骨施設や供養塔や・石仏などを安置したものです。

## ◇宝樹院（ほうじゅいん）

当初は、高照寺こうしょうじといい、三艘さんぞうにありましたが火災に遭い、慶安3年（1650年）現在地に移転しました。小泉純一郎氏の祖父・又次郎氏またじろう（浜口内閣ていしんで逡信大臣）、父・純也氏（防衛庁長官）ほだいじの菩提寺です。

宝樹院が移転する前の室町時代に、この場所に称名寺末寺の常福寺（1147年開山）という寺がありました。同寺の本尊として祀られていた阿弥陀様が、前述の北条実時追善ほうじょうさねときついでん供養くように称名寺本尊と並べ置かれた記録があり、丸みを帯びた強い肩や痩せ気味の体つき等、平安末期の造像の特色があり、神奈川県的重要文化財に指定されました。

大道に關所があったことは、余り知られていませんが、荒廢する金沢文庫と称名寺の再建修理費ねんしゆつを捻出するために、応永29年（1422年）鎌倉公方足利持氏あしかがもちうじの許可を得て関東



<sup>うえすぎのりざね</sup>  
管領上杉憲実の指図により、3年間に限りに大道関所が設けられ、人は二文、馬は三文の通行料を徴収したそうです。一文は、今の貨幣価値に換算すると20円位です。人別（戸籍）を調べるといことは行われなかったそうです。昭和初期まで関所跡があったという話が残っています。

## ◇山王神社（さんのうじんじゃ）

高宗の谷戸左側の階段を上り詰めると小さな社殿があります。境内からは大道村から朝比奈村にかけての緑園を、眼下に眺められました。近くを流れる侍従川に架かる橋を「山王橋」と呼ぶのは、橋から神社までの道が広々とした大道耕地を貫く山王神社への参道だったからです。



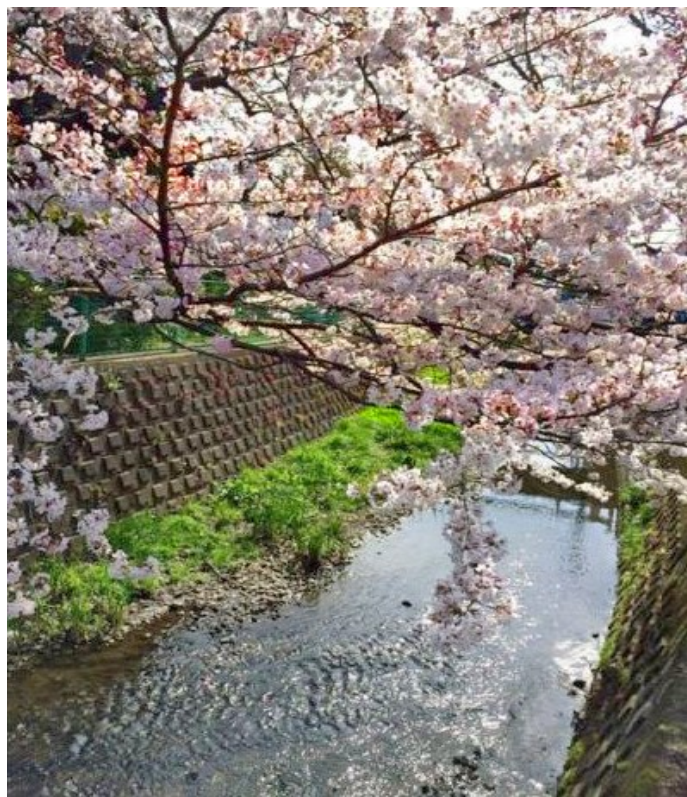
<sup>さるたひこみこと</sup> 猿田彦命 <sup>かんじょう</sup> を祭神に勧請、境内は約40坪。創建の時期など詳細は分かっていません。

明治26年（1893年）の神社明細帳によると、<sup>さんぶむら</sup>三分村大道の氏子戸数は32とあり、村の氏神様として崇められていました。地元民から<sup>さんのうさま</sup>山王様と呼ばれ、<sup>ちごはつみやまい</sup>稚児初宮参り、七五三祝、10月初旬の鎮守祭りなど、多くの村人が参拝しました。



## ◇侍従川（じじゅうがわ）

侍従川は、朝比奈峠を水源とし大道を縦断し、川、三艘を通り平潟湾に注ぐ清流です。川の名は、中世から伝わるてるてひめ こじ 照手姫の故事（う ぼ じじゅう 照手姫の乳母侍従が光傳寺前の川に身を投げたことから侍従川と呼ばれるようになった）に由来します。侍従川の水は清く、絶えたことがなく、しかも地面からすぐのところに水があり、田んぼに水を引いたり、生活用水に使われていたので、大道は大変豊かな村でした。



この川は、うねうねと曲がりくねり、自然の川そのままの姿をしています。

両側は大名竹が生い茂り、遠くからでも一目で川であることがわかります。



侍従川は、神奈川県にある二級河川の一つで、河川延長は1・96Km、流域面積は4・40km<sup>2</sup>です。

侍従川には、<sup>かせんかんし</sup>河川監視カメラが設置されていて、2分間隔で映像が配信されています。大道町内会のホームページ（「大道町内会みんな集まれ」と入力）から素早く侍従川の水位情報を知ることができます。河川監視カメラは、横浜市内には、14カ所（鶴見川、恩田川、大熊川、早淵川、大岡川、柏尾川、侍従川）に設置されています。<sup>だidouあずまばし</sup>「大道東橋」に設置されているのは「六浦二号河川監視カメラ」と言われ、侍従川では、この1カ所だけです。



てるてひめ

## 【照手姫の故事】

金沢には、600年以上前の照手姫の伝説が残っています。照手姫は京都御所の北面武士（警護の武士）の娘でしたが、わけあって妓女となり藤沢の盗賊の首領、横山太郎の屋敷に居合わせました。関東管領の足利持氏に謀反の嫌疑をかけられた小栗判官の横山による殺害計画を事前に知り、これを判官に伝えました。照手姫から知らされた判官は、宴席で毒入り酒を一口だけ飲み、息が途絶えたよう振るまいました。横山太郎は判官主従全員が死んだものと思い、藤沢遊行寺の裏山に捨て置きました。遊行寺の僧に観世音から「判官主従を救え」というお告げがあり、弟子たちを使わせてみると、従者は全員息絶えていましたが、ただ一人温もりのあった小栗判官だけが助け出され、一命をとりとめました。

一方の照手姫は、追われる身となり、六浦まで逃げ延びましたが追っ手に捕えられ、川の千光寺の前の「油堤」という所から川の中へ投げ込まれました。姫は日頃から深く信仰していた観音経を一心に唱えたところ、奇跡的に野島の漁師に助けられましたが、あまりにも美しい姫を見た漁師の妻が嫉妬して、姫小島の青松葉で燻し殺されかけました。ここでも観音経を一心に念じ、無事難を逃れましたが美濃国の遊女に売られてしまいました。燻し松は、現在は埋め立てられ消滅していますが、瀬戸橋北側の姫小島にあった松のようです。

その後、判官の病<sup>やまい</sup>も癒<sup>い</sup>え、藤沢の遊行寺で横山太郎を討ち、謀反取りの疑いも晴れ、ようやく美濃国で照手姫を探しあてました。念願かなって照手姫を妻に迎え、幸せに暮らしたという伝説です。

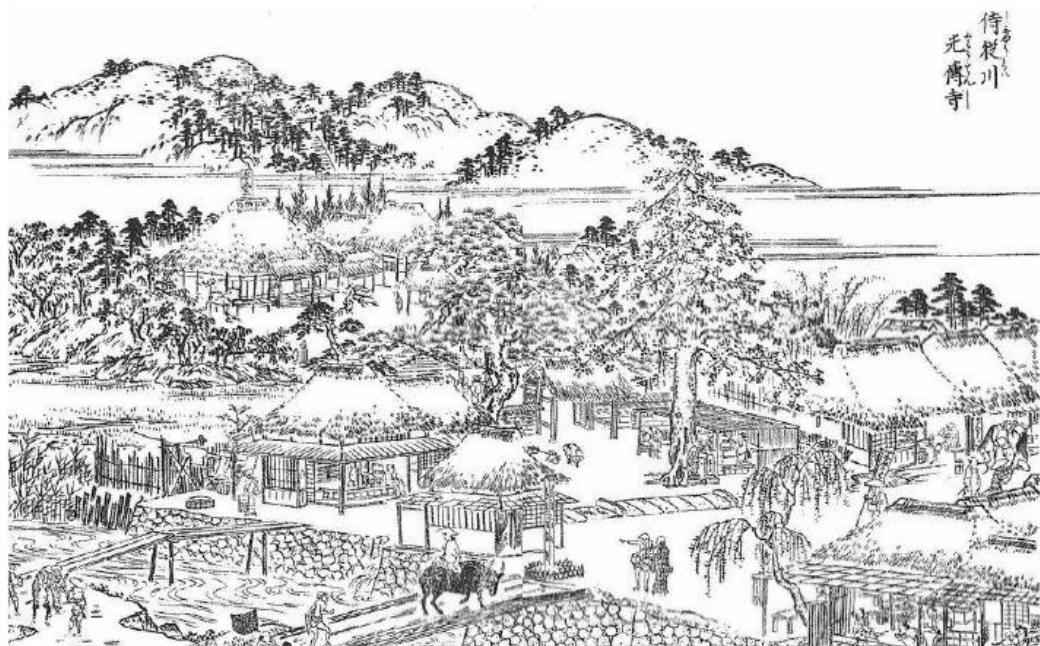
照手姫の乳母侍従<sup>うぼしじゆう</sup>が姫を訪ねたおり、行方知らずに悲しみ、姫の化粧道具を堤に残し光傳寺前の川に身を投げたことから、この川が侍従川と呼ばれるようになりました。（相模風土記稿）

昔の  
大道の  
田園  
風景



- 出典 ・かねさは今昔物語（廣瀬健／廣瀬隆夫 著）  
・ぶらり金沢散歩道（楠山永雄 著）

■コロナが終息したら「大道の巡り歩き」に沿って歩いてみることを考えています。



江戸末期の光傳寺絵図に描かれている大道町内の風景

2021年1月17日 初版第1刷発行

編集者 関 善一郎

発行者 だいでう 大道町内会

住 所 〒236-0035 横浜市金沢区大道1-10-39

URL <https://daido-net.sakura.ne.jp/>